

「鳥取方式」洪水浸水リスク図の解説

区分	手法
基礎資料	<p><河道データ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実測横断測量データ(既存) ・実測横断測量(既存)データがない箇所は、簡易手法により計測(航空レーザ測量、ポール横断等) <p><氾濫原データ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・航空レーザ測量データ、基盤地図情報図(国土地理院)5~10mメッシュ
現地調査	<ul style="list-style-type: none"> ・氾濫原…主要な保全対象を確認する。 (検討区間の設定根拠である主要な保全対象の有無を確認し、必要に応じて検討区間を見直す) ・河道状況…粗度係数の設定のため、河床の状況を確認する。 ・破堤地点…実測横断測量データ(既存)がない箇所は、簡易手法による計測箇所として流下能力が低いと想定される破堤地点を抽出する。
流出解析 水位計算 浸水計算	<p><対象降雨></p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画規模(1/50以下は一律1/50) ※1/50…県管理河川の計画規模を概ね包括する規模 <p><対象流量></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピーク流量のみ。なお、対象河川の下流端(河口部又は本川合流点)及び支川合流点での流量を算出し、支川合流点を流量配分変化点とする。また、洪水到達時間が10分未満のものは一律10分とする。 ・なお、河川整備基本方針、河川整備計画があり、計画流量が設定されている河川では、その流出量の算定方法を踏襲している場合がある。 <p><出発水位、下流端水位></p> <p>河口部の出発水位…朔望平均満潮位相当(T.P.+0.4m)</p> <p>支川の下流端水位…合流先河川水位と自己流水位の高い方(H.W.Lが上限)</p> <p><河川水位></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一次元 不等流計算による。 <p><浸水計算></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一次元 不等流計算による。
氾濫原の 解析条件	<p><メッシュ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・25m分割(メッシュ標高は、25m分割メッシュ内の地盤高さの平均値) <p><盛土・排水路></p> <ul style="list-style-type: none"> ・条件設定しない(考慮しない)
その他 解析条件	<p><築堤区間の堤防評価></p> <ul style="list-style-type: none"> ・流下能力評価(スライドダウン評価はしない) <p><河道流下能力の把握における測線間隔></p> <ul style="list-style-type: none"> ・破堤地点に選定した箇所は一つの測線とするとともに、蛇行部等は必要に応じて測線間隔を短くする。なお、500mピッチを上限とする。 <p><破堤開始水位の設定></p> <p>有堤部：現況堤防高から余裕高を引いた高さ(又は、計画高水位)</p> <p>無堤部：背後地盤高</p> <p><破堤時の堤防敷高></p> <ul style="list-style-type: none"> ・堤防の基部(片岸の堤防が破堤した状態を想定する。ただし、氾濫水位が著しく高い場合は兩岸の堤防が破堤した状態を想定する。)
図面内容	最大浸水深分布(25mメッシュ)

※既往の洪水浸水被害の記録がない等の理由により、シミュレーションの再現性を確認していません。